

# クメール建築装飾の史的展開

石澤良昭監修「アンコール・ワットの解明」シリーズ全4巻 連合出版の3巻、片桐正夫編「アンコール遺跡の建築学」に収録されている原著に、一般の読者を意識して、内容に手を加えると同時に漢字にルビをふったり、用語などに附注を加えるなど加筆を行ったものである。

荒樋久雄

(上智大学アンコール遺跡国際調査団共同研究員)

## 1. 建築装飾を解読する

歴史学は様々な資料にもとづき過去の事実を調査・検討して再構築し、それを歴史的な文脈の中に位置付ける学問であるといえる。しかし、一口に歴史学と言っても、内容は多岐にわたる。使用される資料は一般的には「文字によって書かれた資料(文献)」であるが、美術史の場合は「美術作品」、建築史の場合は「建造物」、考古学の場合は「遺構<sup>1</sup>・出土遺物」というように、その分野により様々なものが研究対象となってくる。

もともと「文献」が限られている文明もある。その一つは「文字」を持たなかった文明である。9世紀より13世紀の500年間に栄華を極めたクメール文明の場合は、「文字」は持っていたものの、15世紀にアンコール王都が放棄された後、獣皮、椰子紙などに書かれた経典や王朝年代記などの維持・管理は行われなかった。そして、カンボジアの気候は高温多湿なため、それらすべてが脆くも朽ち果ててしまったとされている。

アンコール王朝を創り出したクメールの祖先たちが書いた文字としては、寺院などの石壁とか石柱に刻まれた「碑文<sup>2</sup>」しか見つかっていない。彼らは遺跡の入口の砕石材などに、未来へのメッセージとして碑文を刻んだ。現在までに約1300程のクメール碑文が確認・登録されており、それらの殆どはフランス人碑文学者(ルイ・フィノ、ジョルジュ・セデス、サヴェロス・プウなど)により解読・目録化されている。しかし、碑文の多くは寄進文などで、研究資料と役に立つ史実や絶対年代などに直接的に言及されたものは数少ない。

そのため第三者の書いたものではあるが、『梁書<sup>3</sup>』や『隋書<sup>4</sup>』などの中国の歴史書あるいは中国

<sup>1</sup> 古い建造物で今日にその一部が残っているもの。また、古代の構築物の様式や配置などを知る残存物として、土地に残された基壇や柱穴など。

<sup>2</sup> 石碑に刻みつけた文章

<sup>3</sup> 中国、二十四史の一。南朝の梁の史書。56巻。唐の魏徵・姚思廉(ようしれん)の撰。629年成立。本紀6巻、列伝50巻。

<sup>4</sup> 中国、二十四史の一。隋の史書。85巻。唐の太宗の命令により魏徵・長孫無忌(ちようそんむき)ら編。636年、帝紀5巻・列伝50巻が成立。志30巻は別書として656年に成立し、「隋書」に編入されたもので、そのうちの経籍志は書籍についての文献として重要。

人の書いた見聞録『真臘風土記』<sup>5</sup>、さらには 16 世紀以降に来航したヨーロッパ人宣教師などによる記述がクメール史では貴重な文献となっている。

クメール文明といえばアンコール・ワットに代表される壮麗な石造大伽藍<sup>6</sup>が世界的にも有名である。これらの巨大建造物は、当時の「技術の粋」であると同時に、その建設を可能にした働き手の動員力や、その働き手を支える余剰生産物や蓄財などの経済力の反映でもある。もっと言えば、その時代の技術あるいは思想や世界観を含む人文<sup>7</sup>的要素の反映であり、その建設を命じた王および王朝の政治力や経済力のバロメーターになっていると言えるだろう。



なかでも「建築装飾」 建物の表面を上から下まで飾る彫刻は、「芸術の粋」と言っても過言ではないだろう。当時の人々の生活を彷彿させる内容のものもあるし、美的対象物として私たちに語りかけ、陶醉させ、耽美<sup>たんび</sup>な世界に誘い込むものもある。宗教上の事跡・神話・神々などを題材にしたものが多く、それらは、芸術の社会的・道徳的効用なのかもしれないが、その中核に鎮座する神々の彫像とともに「参拝者の渴仰敬神<sup>かつこうけいしん</sup>の対象」になってきている。そこには、当時の人々の宗教観をも垣間見ることが出来る。

こうした「歴史的観点からの建築彫刻の解説」は、史実などが記述された文献や碑文の少ないクメール文明史の研究においては、歴史解明の有効な一つのアプローチになる。以下、アンコールの文化・文明を反映している代表的な「建築彫刻」を歴史的・美術史的視座から眺め、クメール文明の興隆の歴史に迫ってみたいと思う。クメール文明は、インドから受容した様々な文化的要素を巧みに在来の固有の文化に包摂し、発展させ、独自のものとして開化したものである。その過程は、あたかも「人」が幼児期、青年期を経て独立し、成人する様にも見て取れる。従って、クメールの美術様式は、それぞれの時代を代表する芸術的価値を有する寺院名を冠し、プレ・アンコール期（801年まで：4区分）、プレ・アンコール期とアンコール期の過渡期（1区分）、アンコール期（802年～1431年：9区分）の計14期区分で説明するのが一般的であるが、ここではクメール建築彫刻の変容を擬人化し、誕生揺籃<sup>ようらん</sup>期から発展期を経て円熟期、凋落期という区分を設け、その流れに沿って時代を追ってみることにする。

なお、この項で用いる「彫刻」という言葉は、いわゆる仏像彫刻を指すのではなく、もっぱら建物表面を飾る装飾としての「建築彫刻」を指していることを付記する。

<sup>5</sup> 真臘：ベトナム南部のメコン川中下流域（今のカンボジア）にあったクメール人の国家の中国語名。真臘風土記は1296～97年に元朝の使節として来訪した周達観が書いた見聞録。カンボジアの研究には欠かせない貴重な文献。

<sup>6</sup> 〔梵 samgharama（僧伽藍摩）の略。僧園・衆園・精舎（しょうじや）と訳す〕寺の建物。特に大きな寺院。

<sup>7</sup> 人間の創り出した文物・文明。人類の文化。

## 2 建築装飾の史的展開

誕生揺籃期 6世紀頃～8世紀頃（文明の誕生と国風文化の確立）

カンボジアの歴史の創成期を占める扶南<sup>8</sup>は、紀元後1～2世紀より7世紀頃までカンボジア領内のメコン川デルタ地帯に王国を築いたとされる。しかし残念ながら扶南の時代の建築は殆どといって



写真1 馬蹄形アーチ、サンボール・プレイ・クック S2建物内石造天蓋

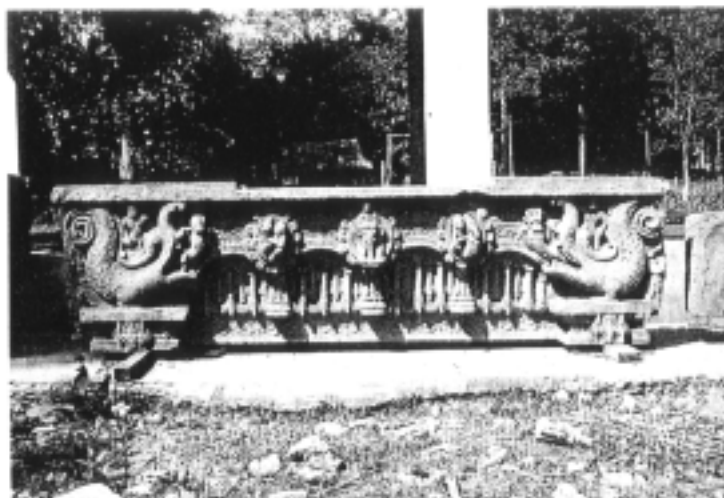


写真2 サンボール・プレイ・クックのマグサ（楯）石

良いほど残されていない。比較対象として6世紀の扶南の都だったアンコール・ボレイからは、インドのグプタ朝美術の影響を受けたとされる、丸みを帯びた緩やかな体つきで、独特の力強い彫像が数多く発見されている。

このアンコール・ボレイに建立されたアスラム・マハ・ルセイと呼ばれる小祠堂<sup>9</sup>や扶南没後、7世紀に王朝を築いた真臘の都であったとされるサンボール・プレイ・クックに残された建築などプレ・アンコール初期の建築では、インド建築に数多くみられる先の尖った馬蹄形アーチの仏龕<sup>10</sup>（写真1）が散見される。

そのほかサンボール・プレイ・クックの楯石<sup>11</sup>に見られる神獣マカラ（インドの伝説上の獣で、呪術的な力を持ち、マカーフヴァーサーと呼ばれる海に住む）のモチーフ（写真2）もやはり5世紀後期のインドのアジャンタ石窟（写真3）などに既に用いら

れており、その源流をインドに見出す事が出来る。またプレ・アンコール期の建築彫刻に見られる彫りの浅い、緩やかで流れる様な彫刻は、インドのアジャンタ、エローラの5世紀頃に建てられた石窟彫刻にみられる唐草文様の緩やかさに近似する。このように初期のクメール建築にはインドと共通

<sup>8</sup> インドシナ半島、メコン川下流域にクメール人が建てた国の中国名。1～2世紀に成立、海上貿易で栄え、インド文化の影響を受けた。北方の真臘（しんろう）に圧迫され7世紀に衰亡。

<sup>9</sup> 祠堂：仏像など信仰対象物を内部に祀る塔または小堂。

<sup>10</sup> 壁面を掘り込み、仏像などを安置する場所。上部を馬蹄形アーチや火炎文様で縁取る例も多い。

<sup>11</sup> 門や窓・出入り口などの上に渡した水平材。クメール建築では前面部に様々な彫刻を施し、建物を飾る主要部材となっている。

した「建築言語」が読み取れる。

しかしながらインド伝来の馬蹄形アーチのモチーフは、プレ・アンコール期にしか見られず、マカラのモチーフに関しても、エローラ石窟のカイラーサ寺院（8世紀）の窓飾り彫刻など、インドでは継続的に用いられている反面、カンボジアでは7世紀前半頃にしか用いられず、以後の建築では消滅する。



写真3 インド、アジャンタ石窟、第六窟

ヒンドゥー教の揺籃<sup>ようらん</sup>の地、インドにおいても、宗教、民族紛争などにより未曾有<sup>みそろう</sup>の建築が消失し、5世紀以降の石窟寺院を除くと7~8世紀の遺構が最古でその数も少なく、クメール建築との比較研究を困難にする原因となっている。ここではクメール建築の源流をインドのいずれの地方に求めることの是非の議論は差し控えるが、東南アジア諸国の「インド化」は、気候風土、土着信仰など基層文化が類似していた点もあり、初期クメール王朝（扶南、

真臘）が王権化、権力集中化を確立する手段として用いたとされている。生誕間もない国家が、近隣先進文明の権力体制、文化、技術を提唱し、自らの根底に持つ文化、習慣と融合させ国家を形成する過程は、日本が中国の諸制度、文化などを受容し、国風化を推進した歴史と酷似するといえよう。

日本人にとっては、それら中国伝来の文化などを起源としつつも、日本文化は日本固有の文化として開花したと考える様に、「インド化」という言葉で語られるクメール文明も、インド一辺倒では無く、文明生誕時よりクメール特有の文化を開花させていたと考えるべきであろう。

この時期の彫刻は、彫刻が角張った感じで素朴さが残り、どことなくぎこちない。しかしそれがかえって、バンテアイ・スレイ（967年頃）の厳格なまでに緻密<sup>ちみつ</sup>に彫刻された、失敗の許されない彫刻とは違う、その当時の未成熟な文明の大らかさを感じ取る事が出来る。また、プレ・アンコール期の彫刻は、図像的、造形的にも変化に富んだ彫刻が輩出され、実に多様である。それはまた、その当時のクメール王国が小王国の割拠する繚乱で不安定な政治的側面を反映しているとも受け取れる。

胎動萌芽期 9世紀~10世紀前半（内乱の終止符と新王朝による中央集権化）

中国史料によると、7世紀にサンボール・プレイ・クックを都としていた真臘は、神竜年間（705~706年）に、「水真臘」と「陸真臘」の二つの国家に分裂したとされる。水真臘は幾つかの小国に分かれ、その一部はジャワの勢力に占領されていた。8世紀のカンボジア国内は動乱の打ち続く混迷

の時代であった。この長く続いた内乱にピリオドを打ち、カンボジアを統一したジャヤヴァルマン二世は、802年、アンコール王都の聖山、プノン・クレンで転輪聖王（宇宙の帝王）として即位する。また、ロリュオスに新都を構え、専制主義の道を歩みだす。残念ながらジャヤヴァルマン二世が建立したとする寺院はロリュオス遺跡群では発見されていないが、パコン、プリア・コー、ロレイなど9世紀後期に建立された寺院が現存する。



写真4 プリア・コーのマグサ石

それらの遺跡に見られる彫刻、とりわけ<sup>まくさいし</sup>楣石彫刻（写真4）などをみると、サンボール・プレイ・クックで見られた稚拙さは既に無く、彫刻も垢抜けし完成度が高い。また彫刻に用いられている唐草模様も、一葉一葉が次の時期の彫刻と比べて大振りであるにもかかわらず、そつが無く、彫刻に勢いがある。その様はあたかも、新しい国家の若さ・力強さをアピールしているかの様である。長く続いた内乱に終止符を打ち、新しい王を頂点とする中央

集権体制を形成したこの時期、彫刻も前時代のどことなく土着的、<sup>どこう</sup>土侯的な雰囲気を感じられる。アンコールを発信拠点とする規範的、中央集権的な彫刻を生み出そうとする雰囲気が感じられる。

#### 発展完成期 10世紀後半～12世紀前期（クメール建築彫刻の大成と最高傑作）

歴史的には、ロリュオスに築かれていた都が、10世紀初頭、アンコール遺跡群の中にある高丘プノン・パケンへと遷都される。続いて928年頃には、都は一度アンコールを離れ、アンコールの北東約80キロメートルの所に位置するコー・ケーに移される。しかし944年に登位したラージェンドラヴァルマン王は、都をアンコールへと戻し、東メボン（952年頃）、プレ・ルプ（961年頃）などの寺院を建設、再びアンコールに繁栄が戻る。



写真5 バンテアイ・スレイのマグサ石

クメール彫刻が最高潮に達するのは、このラージェンドラヴァルマン王の治世に建立されたバンテアイ・スレイ（967年頃）であろう。<sup>まくさいし</sup>楣石（写真5）に見られる複雑に絡み合う形象の構成は、バランス感覚に溢れ、装飾過多であるにもかかわらず、見ている者

に不安感を与えない。また細緻さいしちに至るまで彫り込まれた彫刻は優美温雅おんがで気品に溢れ、遠景よりの均整のとれた美しさのみでなく、手で触れる位置にまで近づいても粗雑さがなく非常に奇麗である。バンテアイ・スレイの彫刻はクメール美術の最高傑作であるといっても過言でない。

また、バンテアイ・スレイの妻飾りには、ラーマヤナなどのインド叙事詩が多用され、今まで硬化的であった建築装飾を動的なものとする。さらに建物全体着飾るかの様に覆い尽くされた彫刻群は、旧来のクメール建築の常識をくつがえ覆くす革新的な様相を示している。

プリア・コー様式（875～893年頃）より、パケン様式（893～925年頃）、コー・ケー様式（921～945年頃）、プレ・ルプ様式（947～965年頃）と経て、バンテアイ・スレイ様式（967～1000年頃）に至る1世紀ほどの間に、彫刻技術はクメール美術史上、至高の域にまで高められ、バンテアイ・スレイ遺跡で結晶化することとなっている。

#### 円熟期 11世紀～12世紀前半（クメール美術におけるマニエリズムの陰）

バンテアイ・スレイ（967年頃）以降、アンコール・ワット（12世紀前期）までの1世紀半の間は、クリアン様式（965～1010年頃）、パプオン様式（1010～1080年頃）などの美術史的区分が出来る程の様式的な発展が見られる。11世紀に入ると建築装飾は円熟味を増し、アンコール・トム都城内のクリアン（10世紀後期～11世紀前期）やパプオン（1060年頃）などの彫刻では、繊細さ、スマートな気品を追い求める傾向が強い。さらにアンコール・ワット（12世紀前半）では、むしろ宗教的厳格さを求め、装飾的芸術の傾向を強めるようになる。しかしながら、バンテアイ・スレイに見られる彫刻の完璧なまでの完成度を越える事は出来ていない。



写真6 アンコール・ワットのマグサ石

パプオン（1060年頃）に代表される様に、この時期、妻飾り<sup>12</sup>、楣石まくさいしなど建築部材の一部にしか見られなかったラーマヤナなどの説話が、壁面を飾る彫刻として用いられ、建物の外観を一新する。また建築技術の発展により、10世紀後期に出現した回廊は、12世紀前期のアンコール・ワットにおいて、内部に壮大な浮き彫りを施した回廊を完成させる。それは正に「劇場寺院」、「美の回廊」という名に相応しい「建築」と「彫刻」の合一を生み出している。

<sup>12</sup> 切妻造りや入母屋造りの屋根の妻に用いる装飾。

ただ、この時期の彫刻は、9世紀末のプリア・コー様式に見られたような若々しく、力強い形象は消沈し、それよりはむしろ、優しい、ゆったりとした彫刻へと変わる。また、<sup>まぐさいし</sup>楯石の装飾（写真6）は、バンテアイ・スレイで完成された均整のとれた神像・花綱・火炎文様などの装飾要素配置が形式化し、各装飾要素を変形、歪曲させる事により、新たなデザインを創出しようとしている。この時代の彫刻は細緻ではあるが何処となくデフォルメ（歪曲）した“いびつさ”が感じ取られる。

9世紀に新興国として再出発を果たしたアンコール王朝も、400年近くの時を経て12世紀ともなると、周辺国との覇権争いに打ち勝ち、大陸部での政治・経済的な地位を不動のものとする。この時期、彫刻の気風も新機軸を生み出すというよりはむしろ、今までに完成された既成のデザインを踏襲し、部分的な変更や、細密化が進む。それがかえって仇となり、彫刻の風合いを損ねる場合もみられる。

#### 凋落期 12世紀後半～14世紀（石造建造物の終焉と文明の破綻）

1181年、ジャヤヴァルマン7世は4年間にわたったチャンバ<sup>13</sup>軍による征服より国土を奪回すると共に、チャンパに軍を進行し属国とする。この時期、クメール帝国の版図は歴史上最大限にまで拡大、クメール朝は絶頂期を迎える。また篤く大乘仏教につかえたジャヤヴァルマン7世は、タ・プロム、プリア・カン、バンテアイ・クデイ、バンテアイ・チュマーなど数多くの寺院を建立し、国家安泰を祈願した。

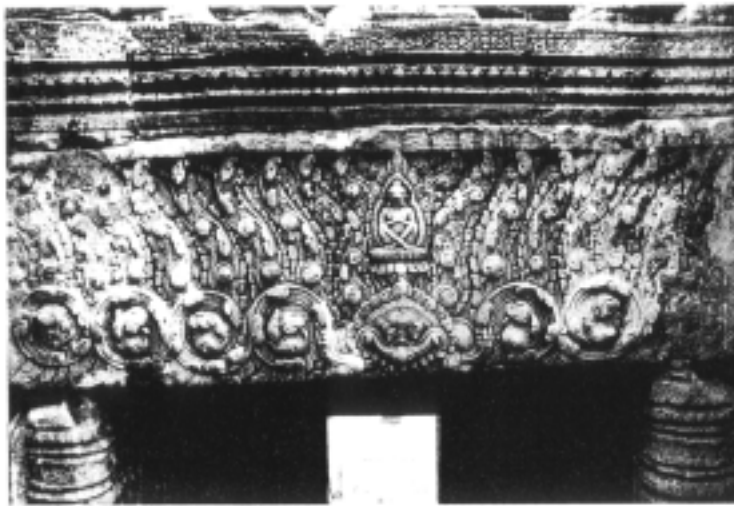


写真7 バイヨンのマグサ石

バイヨン期に入って最初に建設されたとされるタ・プロム（1186年頃）は前様式であるアンコール・ワット様式と直接的に連なり、タ・プロムを飾るアプサラの容姿、髪飾り、装身具などはアンコール・ワットのアプサラに非常に類似する。バイヨン（12世紀末～13世紀初め）では、仏教思想の流れの中で根幹的な変革を見せ、人物描写に迫真性を求めている。バイヨンの彫像は、衣装よりも神秘的な微笑みを伴う明るさをもって描出され、内面

の精神生活が像相からにじみ出るものとなってくる。また、この時期に見られる数多の四面塔は、正が目指した仏道による極楽浄上世界を具現化させた、意匠的にも斬新で画期的な建築であった。

<sup>13</sup> 2世紀末から17世紀末までベトナム南部にあったチャム族の国。インド文化の影響を受け海上交易で栄えたが、15世紀後半ベトナムに征服され、17世紀末に滅んだ。中国では古く林邑と呼び、唐では環王、唐末以後は占城と称した。チャボ。〔「占城」「占婆」とも書く〕

しかし、バイヨン様式の彫刻（写真7）は、旧来の彫刻のスタイルをより一層デフォルメさせたものであり、仕上がりも粗雑である。バイヨン期でもとりわけ後期の寺院では柱、壁画も歪み、垂直な壁面もまともに造れない墮胎的、粗雑な仕上がりが目立つ。彫刻も一定の技法や形式が情性的に繰り返され、型にはまった新鮮味の無い荒唐無稽化が進む。6～7世紀のクメール彫刻の誕生より500年以上もの歳月を経、13世紀に入ってからバイヨン期はいわば「デカダンスな彫刻」が支配する。

建寺王の異名を持つジャヤヴァルマン7世による壮大な宗教都市計画は、膨大な数の寺院建設を伴うものであった。その限界を超えた建設事業は、乱雑、粗雑な建築を生み出す - 万、建設費、維持費に膨大な費用を要した。隣国との覇権争い、版図拡大により、成長の一途を辿ってきたアンコール期が、前代の王朝より一層巨大な都城、寺院施設を生み出そうとした結果、バイヨン期に至り、蹉跎を来したとも取れる。そこには巨大化した「文明の破綻」が汲み取れる。

### 3 装飾に彩られた構造材

#### 楣石と付け柱

彫刻の変遷を言葉で表現すれば、抽象的な表現となりがちで、なかなか掴みにくいところがある。そこで、ここでは生物論的な循環史観で「クメール文明の興亡」と「彫刻の変容」を重ね合わせて捉える事を試みたが、依然として顕然けんぜんとしない点も多い。やはりここはアンコール遺跡を実際に訪問され、彫刻を見分し、自分なりの彫刻様式を組み立てて頂ければ幸いである。

彫刻を比較しながら理解するポイントとしては、遺跡訪問の際、注目する建築部材を決め、そこに彫り込まれている彫刻をじっくり観察・記憶・比較する方法をお勧めしたい。とりわけ建物入口の上部に付く楣石まぐさいしと、その楣石まぐさいしを文える付け柱に用いられている彫刻は、彫刻の判断材料として比較しやすい。

また、自分の見た遺跡の年代とその特徴を記憶し、違った年代の彫刻と見比べてみると良い。例えばクメールの彫刻の頂点をなすバンテアイ・スレイ（写真5）の規律正しい楣石まぐさいしの彫刻を見た後に、バイヨン期（写真7）の仕事の粗い不均質な楣石まぐさいしの彫刻をみると、クメール彫刻の質の優劣が、一目でわかるであろう。楣石まぐさいしは入り口上部の重い石壁を受けるために挿入された構造材である。しかし、拝観者が寺院訪問の際、まず目に入る彫刻として、それぞれの寺院の個性を表現する重要な役割を果たし、寺院正面を飾る装飾として一際目を引く位置にある。

インド建築においても建物の入口は、枠状に石材を組んで、開口部をつくるが、クメール建築の様に楣石まぐさいしを敢えて入口前面部に挿入し、上部を支える工法は取らない。インド建築の開口部廻りはもっとすっきりとまとめ上げられている。クメール建築における楣石まぐさいし構造、そしてそこに施された彫刻には、クメール建築独特の発展が読み取れるのである。クメールの工人達は、楣石まぐさいしをキャンバス

に見立てて、表面に華やかで豊かな彫刻を施した。それは彼らにとっても自らの彫刻技量を発揮する場として格好の部材で、彫物師各人が腕をふるったのであろう。

#### 楣石彫刻に見られる建築年代の見方

クメール建築における最も古い楣石彫刻にサンボール・プレイ・クック様式（図1、写真1）が挙げられる。7世紀前半に見られるこのスタイルは、インドの建築装飾であるマカラを両端に配し、その口より吹き出るベルトが特徴的である。円弧を描くベルトは楕円形のメダルで分割され、ベルトの下には垂下る綱（以後、ここでは「懸垂綱」と呼ぶ）が配される。この綱の端部には要所に「蓮華」（蓮の花）が用いられる。

次の様式であるプレイ・クメイン様式（図2）では、楣石両端のマカラは消失し、火炎状の紋様がベルトの両端部を飾る。前様式であるサンボール・プレイ・クック様式では、楕円形のメダルに神像などが彫り込まれていたが、プレイ・クメイン様式のメダルは火炎装飾へと変化する。また、この時期、円弧を描いていた中心部のベルトは、一直線に配される場合が多く見られる。

プレイ・クメイン様式まで見られた楣石中心部を横断する角張ったベルトは、コンボン・プリア様式（図3）に入り、花綱と呼ばれる丸みを帯びた紐状装飾へと変化する。このコンボン・プリア様式に見られる彫刻は花綱の上下に火炎状の唐草紋様を施した後代の装飾要素の配置と近似するが、全面が葉飾りで覆われ、単調さが拭えない。彫刻全体はバランスよく構成されているが、細部の表現を排し、前時代より単純化される。クレン様式（図4）に至ると、「中央に神像を配し、その両脇より延びる花綱、そして花綱の上下で渦巻く火炎文様」と以後次第に形式化してゆく装飾要素の構成が見られる。この時期、コンボン・プリア様式で一時消失した蓮華を先にあしらった懸垂綱がみられる。しかし、これは副次的な装飾として火炎状唐草装飾の合間に添えられるのみであり、以後、次第に消失する。

符牒の様に用いられてきた神像、花綱、火炎文様、蓮華などの装飾要素がバンテアイ・スレイ（図5、写真5）において完成された形で構成される。完成された作品はやがて規格化され地方へも流布する。しかし、完成度が高ければ高いほど、次代の作品はそれを乗り越えるのに独創的な想像力を要する。バンテアイ・スレイで完成の域にまで到達した装飾要素は、以後より一層の緻密化が図られる一方、各構成部材のデフォルメを引き起こす。とりわけ中心部を貫く花綱は、次第に上下に歪曲する。アンコール・ワット様式（図6、写真6）では、細密化の一方で、花綱が上下に歪曲し、また、時として花綱下部の火炎紋様と融合する。

バイヨン期前期（図7）では、花綱と火炎紋様がさらに融合し、両者の区別がつかない。またバイヨン期後期（図8、写真7）では花綱、火炎紋様の代わりに壁面の縁取りに用いられるS字懸垂唐草紋様が施される。また今まで花綱止部を飾っていた火炎紋様が面全体の上半を占める程に強調されるようになっている。



図1 サンボール・プレイクック様式 (約600-650年) インドの建築装飾であるマカラを両端に配し、その口より吹き出るベルトが特徴的



図2 プレイ・クメン様式 (約635-700年) マカラ両端のマカラは消失し、火炎状の紋様がベルトの両端部を飾る

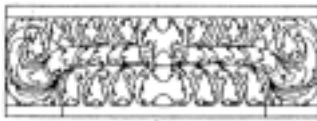


図3 コンボン・ブリア様式 (約706-826年) ベルトは花綱へと変化するが全面が単純な装飾にて構成される



図4 クレン様式 (約825-875年) 「神像」「花綱」「火炎文様」と以後形式化してゆく装飾要素にて構成される

(図版: Maurice Glaize, ANGKOR より)

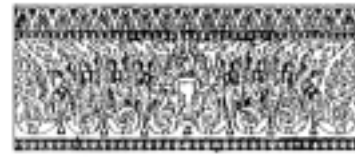


図5 バンテアイ・スレイ様式 (約967-1000年) 各装飾要素が見事に構成され、非常に完成度が高い



図6 アンコール・ワット様式 (約1100-1175年) 繊密化の一方で、花綱が上下に歪曲し、局として花綱と火炎紋様と融合する



図7 バイヨン様式 (前期, 12世紀後期頃) 花綱と火炎紋様がさらに融合し、両者の区別がつかなくなる



図8 バイヨン様式 (後期, 13世紀前期頃) 花綱、火炎紋様の代わりにS字型草唐草紋様が画される

(図版: Maurice Glaize, ANGKOR より)

第三章 アンコール建築のかたちと技術

彫刻（建築）は歴史の「証跡」である。

歴史とは、過去に起こった出来事、人間社会の移り変わりの過程であるとされる。また、その中で歴史学、建築史研究の考え方も最初で多少ふれた。歴史的に起こった事柄は過去の出来事として私たち目の前には存在する事は無い。

しかしながら、アンコール・ワットは12世紀前半に建立されて以降、アンコール王朝全体の没落後も上座仏教の寺院として命脈を保ち、カンボジアの人々によって、信仰の対象として長く篤く祀られて来た。その結果、他の寺院が密林に埋もれ「遺跡」となる一方で、宗教的な機能を持った「寺院」として、その当時の美しさを今に伝える。それは21世紀を迎えた私たちに、直接的にアンコール王朝の栄華を伝えてくれる貴重な遺産であり、現代の私たちの事象を歴史として未来の人々に伝えてくれる「証跡」でもある。

歴史を私たちに語ってくれる文化財は、現在の歴史を未来に伝える文化財として後世に受け継がれる事となるのである。